majimun lens 地名遊行

伊波 一志

『majimun』とは、琉球弧に伝承される魔物の総称です。『lens』とは、文字通りカメラの「レンズ」という意味の他に「眼の水晶体」を表します。
「君は、魔物の眼で世界を見ているようだね。」
かつて、僕のポートフォリオをご覧になったある方のこの感想がきっかけで生まれたのが『majimun lens』というシリーズでした。さらに、地名や場所に意味がある被写体に特化した作品として生まれたのが『majimun lens 地名遊行』です。
撮影時期は、主に 2009～2012 年の 4年間。修行のごとく各地を巡りながら撮影しました。
写真機とは、被写体から飛んでくる光を感光面で結像し、記録する機械ですから、可視光線しか捕らえられない一般的なカメラには、いわゆる現実的にそこにあるものしか写りません。ただ、当時の僕は「あの世とこの世」「死と生」「過去と現在」を写したいという思いが、強くありました。
もちろん、合理的に考えれば「あの世」「死」「過去」を物理的に写せないことはわかります。そこで、僕は、「あの世とこの世」「死と生」「過去と現在」の境界・はざまにある具象を写そうと決意したのです。
現在、手元にある作品は、バライタ印画紙へのオリジナルプリントです。銀塩の粒子の中に、当時の思いや魂が包摂されていたらいいなあ、などと夢想しています。

"majimun" is a general term for monsters that are handed down in the Ryukyu Arc. "Lens" literally means "lens" of the camera, as well as "lens of the eye".
"You seem to see the world with the eyes of a monster."
This comment from someone who once looked at my portfolio led to a series called "majimun lens". In addition, " majimun lens Chimei Yugyo" was born as a work specializing in subjects that have m eaning in place names and places. (Chimei Yugyo is difficult to translate into English. If I dare to translate, wander like a monk in search of a meaningful place name.)
The shooting period was mainly for four years from 2009-2012. I took pictures while traveling around the place as if I were training.
Since a photographic device is a machine that forms an image of light emitted from a subject and records it, a general camera that can only capture visible light can only capture what is realistically there. However, at that time, I had a strong desire to capture "the other world and this world","death and life," and "the past and the present."
Of course, if you think rationally, you can understand that you cannot physically capture "the other world", "death", and "th e past". Therefore, I decided to capture the concrete image that lies between the boundary between "the other world and this world," "death and life," and "past and present."
The work I have now on hand is an original print on Baryta photographic paper. I wish that the silver halide particles contained the thoughts and souls of that time.

『2009　砂辺海岸　　沖縄本島、北谷町砂辺』
"2009 Sunabe Coast Okinawa main island, Chatan town Sunabe"

『2009 ギリムイグスク　　沖縄本島、南城市大里』
"2009 Girimuigusuku Okinawa main island, Nanjo City Ozato"

沖縄戦において本島最初の上陸・占領（本島へは読谷村から北谷町にかけての海岸に上陸）地点である(現在は基地関係者の賃貸アパートや住宅が多く建つエリア)。
１９４５年4月1日、遙か向こうの海には1，５００隻の艦船、１８万人の兵士が結集していた。米軍は上陸前、後にわたって猛烈な艦砲射撃を行い、一説では住民一人に換算すると５０発の砲弾を撃ち込んだという。沖縄戦史で『鉄の暴風』と呼ばれている。
日本軍は持久戦を方針として上陸地点では激しい抵抗を行わなかったので、その日のうちに読谷と嘉手納の飛行場が占領された。

別名、ギリムイ御嶽。島添大里グスク近くの市道南側の小高い森に位置している。築城者・築城年代不明。ここはグスクというよりも聖域の部類に属すると思われるが、島添大里グスクが築かれる前の、政治的支配者の居住地であったともいわれている。グスク内には古いお墓や拝所などがところどころに存在している。

『2009 百按司墓（むむじゃなばか）沖縄本島、今帰仁村運天』
"2009 Mumujana Tomb Okinawa main island, Nakijin village Unten"

運天港の北東の崖に造られた古墓。岩陰の穴を取り囲むように、餅型に石垣が積み上げられ、塗り固められている。現在は甕の中に人骨が納められているが、かつては、墳墓内に無数の白骨が重なり合っていたという。1、薩摩軍による琉球侵攻の際、戦没者の遺骨を合葬したもの、2、第一尚氏王朝最後の王・尚徳の遺臣等を葬ったもの、3、北山王の墓、といい伝えはいくつかあるが、いまだ解明されていない。

『2009 内間御殿（うちまうどぅん）沖縄本島、西原町嘉手刈』
"2009 Uchima Udwun Okinawa main island, Nishihara town Kadekaru "

内間御殿は、第二尚氏王統の始祖である金丸（のちの尚円王）が内間地頭に任ぜられたときの旧住宅跡に、尚円王没後190年も経てから建てられた神殿。

『2010 ノロの墓　奄美大島、龍郷町浦』
"2010 Noro's grave Amami Oshima island, Tatsugo town Ura "

奄美のノロの集団墓地。昔のノロたちは、自分の家の墓には入らないで、みんなこのノロ墓に入っていたという。集落の中で最も恐れられ、人の立ち寄らない場所である。ノロ神がシマ守りの神様・親戚助けの神様と言われる一方で「呪う神様」として近寄ってはならないと言われている。

※ ノロは沖縄県と奄美群島の琉球の信仰における女性の祭司。 神官。巫。 地域の祭祀を取りしきり、御嶽を管理する。琉球王国による宗教支配の手段として、沖縄本島の信仰を元に整備されて王国各地に配置された。

『2009 沖縄刑務所　沖縄本島、南城市知念』
“2009 Okinawa Prison　Okinawa main island, Nanjo City Chinen”

外国人・禁固受刑者・若年者・初犯者・再犯者・心身障害者と幅広い分類の受刑者が集まる男子刑務所である。収容定員は319名。

『2009 ハーフムーン　沖縄本島、那覇市真嘉比』
“2009 Half Moon Okinawa main island, Naha City Makabi”

『2002 斎場御嶽（せーふぁーうたき）沖縄本島、南城市知念』
”2002 Sehfa Utaki　Okinawa main island, Nanjo City Chinen”

かつて、那覇・新都心のすぐ東の真嘉比に、こんもりとした大道森（だいどうむい）」があった。米軍は、ここをハーフムーンと称していた。すぐ西のシュガーローフとともに、この一帯の攻防戦は、沖縄戦における日米最大の激戦だったといわれている。写真は造成前のハーフムーン。2023年現在、ハーフムーンは消え、コンビニやマンションが立ち並ぶ。
無数の回収不能な遺骨は土の中に蓋をして隠された。

御嶽とは、南西諸島に広く分布している「聖地」の総称で、斎場御嶽は琉球開びゃく伝説にもあらわれる、琉球王国最高の聖地。琉球の最高神女であった聞得大君（きこえおおきみ）の就任の儀式はこの斎場御嶽で執り行われた。2000年12月、首里城跡などとともに「琉球王国のグスク及び関連遺産群」としてユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。

『2010 志喜屋グスク 沖縄本島、南城市知念』
“2010 Shikiya Gusuku　Okinawa main island, Nanjo City Chinen”

分類・築造年代・築造者等々、すべて不詳。志喜屋集落北方の岩山にあり、山石積みのかなり古いグスクであると考えられている。中には共同墓地があり、近年まで雑木の中にうもれていた。グスク発生における問題を解明する重要な文化財とされている。

『2010 安脚場戦跡　加計呂麻島、瀬戸内町安脚場』
“2010 Ankyaba Battle Site Kakeromajima Island,Setouchi town Ankyaba

加計呂麻島は奄美大島の南側に大島海峡を挟んで存在する東西に細長い離島である。大島海峡は水深が深く、東西両側で外海に接続していることから、海峡内の加計呂麻島側にある薩川湾が連合艦隊の泊地として用いられていた。
この泊地を防衛するために、大島海峡東端に面した加計呂麻島の安脚場（あんきゃば）集落東側の加計呂麻島東端に軍事施設が置かれていた。

『2010 港川フィッシャー遺跡　沖縄本島、八重瀬町港川』
”2010 Minatogawa Fissure Ruins Okinawa main island, Yaese town Minatogawa”

港川フィッシャー遺跡とは、2万2千年前の人骨化石の「港川人」の出土地のほか、縄文時代から、近代まで連綿と人々の生業の地として利用されていた複合遺跡。1970年、大山盛保氏により、当時、琉球石灰岩（粟石）採石場の一画にあったフィッシャー（岩の割れ目）内の堆積土中から、2万2千年前の人骨や動物化石が発見された。それ以降本格的な発掘が行われ、1974年に、完全に近い全身骨を5～9体発見された。発見された人骨は港川人と称された。

『2012 旧泡瀬ゴルフ場跡地　沖縄本島、北中城村ライカム』
“2012 Former Awase Golf Course site Okinawa main island, Kitanakagusuku village Rycom”

かつて沖縄県中頭郡北中城村のキャンプ・フォスター内にあった在日米軍専用のゴルフ場である。日米合同委員会によって条件付きの返還が合意され、2009年、新設の海兵隊のゴルフ場（Taiyo Golf Club）が嘉手納弾薬庫内に建設され、2010年7月31日に泡瀬ゴルフ場が返還された。現在は多機能複合型ショッピングモール「イオンモール沖縄ライカム」や中部徳洲会病院などが建ち、北中城村の都市開発拠点となっている。

『2002 嘉数高台　沖縄本島、宜野湾市嘉数』
“2002 Kakazu highlands Okinawa main island, Ginowan City Kakazu”

「嘉数の戦い」とは、太平洋戦争末期の沖縄戦において、嘉数高台をめぐって1945 年 4 月 8 日（7 日）からの 16 日間に行われた戦いである。この戦いは沖縄戦最大級の戦闘の 1 つとしても知られるほどの激戦であった。日本軍は低地に「反斜面陣地」を構築して米軍に劣る火力をカバーし、頑強に抵抗したため、嘉数は米軍からは「死の罠」「忌々しい丘」などと呼ばれた。写真は「嘉数の戦い」があった嘉数高台展望塔から望む普天間基地。

『2010 イヤンヤ洞窟　奄美大島、笠利町土浜』
“2010 Iyanya Cave Amami Oshima island, Kasari Town Tsuchihama”

弥生時代の土器が出土していることから、縄文から弥生にかけての住居と考えられる。その後、風葬墓として 1975 年ごろまでは使用されており、人骨などが散乱していた。

伊波一志/Kazushi Iha

１９６９年沖縄生まれ。写真家。
香川大学法学部卒業。
２０代の頃の海外（インド・タイ等）一人旅をきっかけに『写真』に出会う。
自慢は、２００７年、四国八十八か所巡りにて全行程 1400ｋｍを４５日間で
踏破したこと。 ２０１２ 年までは写真家として地道に活動していたが、
２０１３年以降、強烈な虚無感から逃れることができなくなり、ほぼ活動休止。
２０２２年２月、約１０年ぶりの個展を開催し復活。現在、写真家として再始動中。

写真展　個展

2009　『majimun lens』　Roguii

2011　『母の奄美』gallery M&A

2012　『わたくしの痕跡』gallery M&A（「連続写真展　沖縄で／写真は」）

2022　『from photography』rat＆sheep

写真展　グループ展

2009　「写真する人 vol.1」沖縄県立博物館・美術館

2010　「写真する人 vol.2」沖縄県立博物館・美術館

2012　 復帰４０年写真展「眼の記憶」那覇市民ギャラリー

2017　沖縄本土復帰 45 年特別展「写真家が見つめた沖縄 1972-2017」沖縄県立博物館・美術館

Born in Okinawa in 1969. Photographer.
Graduated from Kagawa University Faculty of Law.
When I was in my twenties, I traveled abroad (India, Thailand, etc.) alone, and encountered photography. In 2007, I covered the entire 1,400 km in 45 days on a tour of 88 places in Shikoku. Until 2012, I was steadily working as a photographer, but since 2013, I has been unable to escape the intense feeling of empti ness and has almost stopped working as a photographer. In February 2022, I held my first solo exhibition in about 10 years and made a comeback. I am currently restarting as a photographer.

Photography Exhibition　Solo Exhibition

2009　"majimun lens"　Roguii

2011 "Amami,my mother's hometown" gallery M&A

2012 "Traces of Me" gallery M&A ("Photograph Series: In Okinawa")

2022　"from photography"rat＆sheep

Photography Exhibition　Group Exhibition

2009 "Photographer vol.1" Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

2010 "Photographer vol.2" Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

2012 40th Anniversary of Okinawa's Return to the Mainland Special Photo Exhibition "Memoryof the Eye" Naha Civic Gallery

2017 45th Anniversary of Okinawa's Return to the Mainland Special Exhibition "Okinawa 1972- 2017 as Seen by Photographers" Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

site:www.ihakazushi.com
mail:ihakazushi@gmail.com